

平成 30 年 5 月 17 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370429

研究課題名(和文)「少女小説」の受容とコロニアリズムの関係をめぐる日露比較研究

研究課題名(英文) The Comparative Study on Relationship between the Reception of Girls' Literature Colonialism in Japan and Russia

研究代表者

溝淵 園子 (MIZOBUCHI, SONOKO)

広島大学・文学研究科・准教授

研究者番号：40332861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「少女小説」が形成されるに際して、少女をめぐるさまざまな欲望が、近代の日露双方の文化において歴史的・政治的文脈とどのように関わり合うのかという問題について、比較文学の視点から考察したものである。分析を通して、欧米の「少女小説」を受容する形でこのジャンルが生まれたこと、戦争を経験する中でよりジェンダー規範が強化され、コロニアリズムとパターナリズムが交錯する物語という一つの枠組みが構築された面があること、その物語が女子教育の進展や大量印刷技術の発展を背景に少女たちに波及していったことが明らかになった。こうした特徴は、近代の日本とロシアにおいて、部分的に共有されていると考えられる。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to trace, from the viewpoint of comparative literature, how the various desires surrounding girls interacted with the historical and political context in the modern Japanese and Russian culture in the course of forming "the novels for girls". Through the analysis, the following three aspects were clarified. The first is that this genre was formed in accepting "the novels for girls" of Western Europe and the United States. The second is that the strengthening of gender standard through experience of wars lead to construct a frame of narrative intermingling colonialism and paternalism. The final aspect is that such story as this spreaded among girls of those days as the background of progress of female education and development of mass-media by high-volume printing technology. It is thought that these features were partially shared among modern Japan and Russia.

研究分野：比較文学

キーワード：少女小説 日露 比較研究 近代 翻訳 ジェンダー コロニアリズム

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、2001年度(平成13年度)より、メディアにおける異文化表象の比較文化的研究に取り組んでいた。この問題をさらに深化させるため、2014年現在までの間、ロシア文化における表象としての日本および日本人や、日本文学における表象としてのロシアおよびロシア人について、戦争や女性表象と関連づける試みを続けてきた。

その過程で、少女を特殊なカテゴリーとして囲い込む少女雑誌というメディア文化が、戦争という局面に触れた時、少女たちは、少年たちとは異なり、ある面では政治や戦争から巧みに退けられ、またある面では、日英同盟の寓話の例のように、巧みにそこへ取り込まれるよう期待された形跡を確認した。また、ロシアの具体像を共有しないことを共有するという逆説を担保しつつ、少女雑誌というメディア文化の内部で世界文化におけるロシア文化の序列化・配列がなされていたという可能性が浮かび上がってきた。

考察の結果、ジェンダー規範やオリエンタリズムが明瞭に反映される「少女小説」という特殊なジャンルの重要性に着目するに至った。大正期から昭和前期にかけて、(1)日本の少女雑誌におけるロシア人表象や、ロシアの児童雑誌における日本人表象が、アメリカを中心とする英語文化圏を經由して形成されていること、(2)ロシアで人気を博した、チャールスカヤ(Lidia Alekseyevna Charskaya)による「少女小説」(「ニイナ」シリーズ)が、アメリカ経由で、少女向け「世界家庭文学全集」(昭和8年)の一巻(前田晁訳)として重訳されていること、(3)日露の少女小説の成立条件に西欧・米の少女文学の影響が不可欠であったこと、(4)「少女小説」において家庭物語とともに女性化された冒険物語が量産され、コロニアリズム的色彩を帯びていること、以上の4点が明らかになった。

しかしながら、ここでの考察は、日本とロシアという二項を単線で結ぶ文化的関係の中で捉えたものであり、その意味では限界があったことは否定できない。そこで、本研究では、これまでに得られた研究成果をもとに、アメリカを結節点とする西欧文化圏の軸を導入することによって、「少女小説」というジャンルに内在する帝国主義下の異文化表象とジェンダーの相互関連性を、世界的ダイナミズムの中で複層的に把握することを目指すこととした。

2. 研究の目的

「少女小説」というジャンルにおいては、近代の日本とロシアの少女をめぐる文化の中で、欧米少女文学の翻訳の形で受容されたお伽噺の世界が、異文化(西欧)への憧憬やコンプレックスと相俟って、ある種の異世界ファンタジーが形成された面がある。女子教育の発展とともに少女文化の担い手となっていく読者層に強く支持されるとい

う過程が日露双方に共有されている。「少女小説」形成をめぐる様々な欲望は、自分の居場所として理想の家庭の見つけ出すという物語や、異国の風景を伴いつつ少女の自己実現が冒険によって果たされるといった物語などの形で顕在化したと考えられる。それが、歴史的・政治的コンテクストとどう切り結んでいるのかについて、以下の3点を通して考察することが本研究の当初の目的であった。

- (1) 20世紀前半の日本とロシアにおける西欧の「少女小説」の受容径路を確認すること。
- (2) 国家や社会が戦争を体験する中でなされていく「少女小説」というジェンダー化されたジャンル形成とそれを成立させるフレーム(枠組み)の構築を調査すること
- (3) 生産されるメディア・テキストにおける物語の規範化および再生産の構造を検討すること。

3. 研究の方法

本研究では、翻訳文学研究の観点から、主に受容理論と主題研究の研究手法を用いた分析と考察を行った。具体的には以下の4点である。

- (1) 一次資料の分析にあたっては、テキストの物語分析による主題、ジェンダーとコロニアリズムの関連、欧米の少女小説の受容の様相から日本およびロシア文学における異文化変容のプロセス、以上の3点に注目した。
- (2) 西欧の「少女小説」の受容と自らのジャンル形成の検証を、翻訳作品データの収集を通して行った。
- (3) アメリカを經由したロシア「少女小説」の日本移入ルートを確認し、20世紀前半の世界的な翻訳文学のダイナミズムにおける重訳の問題を取り上げることを通して、文化の受容の局面において仲介文化の果たした役割を可視化させた。
- (4) 上記3点をふまえた上で、文学の翻訳と文化の仲介をめぐって、今後の理論化へ向けての手がかりを探った。

4. 研究成果

(1) 成果

多岐にわたる「少女小説」の定義を整理した上で、成人向けの雑誌で少年少女を主人公とする小説を書いた芥川龍之介やアントン・チェーホフらの作品を取り上げ、少女を読者対象とする「少女小説」とジェンダーとの関係を検討した。その結果、モチーフとしての少女とカテゴリーとしての少女の間には差異のあることが示された。この成果の一部は、口頭発表「芥川と

チェーホフの関連性」や論文「芥川とチェーホフの関連性 「疑惑」の位置づけについての試論」、概説「奉教人の死」に反映されている。

明治から昭和初期にかけての日本における「少女小説」の系譜を概括した。また、ロシアの「少女小説」の代表的作家であるリージャ・チャールスカヤの作家活動を中心に調査し、主要作品の分析を行った。以上を通して、重要な主題と考えられる少女小説の物語で果たされるコロニアルな欲望が、20世紀前半の帝国主義の拡張と連動する相貌が明らかになった。さらに、これが日本とロシアの少女小説に構造的に組み込まれ、一つの規範をなしていくことも確認できた。この成果の一部を論文化し、学術雑誌に投稿した。

欧米の「少女小説」のロシア語翻訳を中心とした資料を収集し、また日本におけるロシアの「少女小説」の受容にあたり、英語への翻訳に至る経緯をめぐってアメリカの亡命ロシア人が果たした役割を確認した。さらに、欧米の家庭小説が日本語に翻訳される潮流に乗る形で、ロシアの少女小説が移入したことも明らかになった。この成果の一部を、と合わせて論文化し、学術雑誌に投稿した。日本のロシア文学翻訳史において、大正期以降のいわゆる職業翻訳家によるロシア語からの直接訳が主流をなす中で、「少女小説」の領域では、他言語を介在させた重訳への虚領土が高かったことを明確にした。また、とりわけ日本における新興ジャンルとしての「少女小説」は、児童文芸雑誌『赤い鳥』を介した欧米の児童向け小説の翻訳の場合と同様、二つのルートがあったことも確認された。一つのルートは、ロシア文学専門家による翻訳であり、もう一つのルートは児童文学専門家による重訳であった。この成果の一部は、論文「日本文学の伝統に根ざす」に反映されている。

(2) 研究上の意義

本研究は、各分野の先行研究をふまえて、これまで研究対象として、ややもすれば周縁におかれてきた日本の少女雑誌やロシアの児童雑誌といったマスメディア文化における戦争・ジェンダー・異文化表象の相互関連性に立脚するものである。

本研究の特色は、メディア・テキストとジェンダー、メディア・テキストと異文化受容、メディア・テキストとコロニアルリズムというように、従来の研究で主に二項のユニットで論じられる傾向にあったテーマを有機的に連関させようとした点にある。

(3) 位置づけと今後の課題

本研究に関連する先行研究としては、日露比較文学の分野での翻訳文学研究、日本近代文学の分野での少女小説研究、ロシアおよび欧米の少女小説研究が射程に入る。

では、明治期を中心にロシア文学の翻訳研究の蓄積が多くなされており、近年では各論から通史的研究へと展開している。だが、従来の研究は、直訳重視で重訳軽視の向きがあり、本研究が対象とする仲介（重訳）によってなされた異文化受容の問題が見落とされる傾向にあった。重訳を再評価するようになったのは近年の傾向と言える。そうした状況下で、本研究が対象とした、ロシアの「少女小説」がアメリカを経由して日本で受容されたことに着目した研究は、管見の及ぶ範囲では確認されていない。には、「少女小説」のジャンル形成をめぐる研究成果や、「少女小説」史を概観した先行研究がある。ただ、そこでは「少女」というカテゴリー形成と翻訳文学との関連性の問題はほぼ扱われていない。は、英米の少女小説研究が質量ともに充実しているが、ロシア文学研究ではソ連時代に大衆的な女性小説が蔑視された影響で少女小説の研究は見当たらず、日本でも数名による優れた先行論があるものの、十分とはいえない状況にある。本研究は、各分野の先行研究をふまえて、これまで研究対象として周縁におかれてきた、重訳された翻訳文学の再評価、日本とロシアの少女小説をめぐるジェンダー・異文化表象・コロニアルリズムの相互関連性に立脚した研究として今後の発展が見込める領域にあると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

瀧淵園子, ロシアの日本近現代文学研究, 『日本近代文学』, 第92集, 査読無, 2015年5月, pp. 209-212,

瀧淵園子, 芥川とチェーホフの関連性「疑惑」の位置づけについての試論, 『日本研究教育年報』20, 査読無, 2015年3月, pp. 143-148

瀧淵園子, 異文化への視線が意味するもの—「五足の靴」試論—, 『國文學攷』第228・229号, 査読無, 2016年3月, pp. 27-38

〔学会発表〕(計1件)

瀧淵園子, 芥川とチェーホフの関連性, 国際芥川龍之介学会第9回スロベニア大会/ European Association for Japanese Studies International Conference, 2014年8月25日, スロベニア国立リュブリャナ大学

〔図書〕(計2件)

溝淵園子, 日本文学の伝統に根ざす ということ, 山内祥史編『太宰治研究』22, 和泉書院, 2014年, pp.141-146
溝淵園子, 奉教人の死, 庄司達也編『芥川龍之介ハンドブック』, 鼎書房, 2015年, pp. 153-155

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

溝淵 園子 (MIZOBUCHI SONOKO)

広島大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号: 40332861